

27	田原	田原市立田原中学校	-----アサノ ナナミ-----	
			名前	浅野 七海
分科会番号	20	分科会名	総合学習	

研究題目

校区の自然の魅力に気づき、協働して探究活動に取り組む子の育成

一小学校4年「ふじおランドわくわく計画

～広場の自然を生かしてみんなで楽しもう～」の実践を通して～

1 はじめに

本校の校舎裏には藤尾山があり、「ふじおランド」と呼ばれる自然の広場がある。しかし、子どもにとって、自然が身近にあることは当たり前となっており、その魅力に十分気付いているとは言えない。そこで、自然豊かな校区に愛着をもち、その魅力を実感できる子どもの育成を目指し、本研究では校区の自然を題材にした学習を展開した。

1学期の「黒川湿地マスターになろう」では、生息する生き物や植物を観察したり、インターネットを使って調べたりした。しかし、与えられた課題を解決することに満足し、学びを他者へ発信したいという思いをもつまでには至らなかった。その原因として、子どもが対象に魅力を感じるまで関わる時間を用意できなかったことや、互いの意見を交流し、課題を自分事として捉えられなかったことが要因として考えられる。そこで、子どもが地域の自然の魅力に気づき、友達と協働しながら主体的に探究活動へ取り組む姿を目指し、本研究に取り組んだ。

2 目指す子ども像

本研究では、次のような目指す子ども像を設定した。

- (1) 身近にあるふじおランドの魅力に気付くことをきっかけにして、地域の自然に関わろうとする子ども
- (2) 友達と協働して問題解決や探究活動に取り組もうとする子ども

3 研究の仮説と手立て

【仮説①】

自然豊かな地域を題材として、納得できるまで対象と十分に関われるように単元構想や授業展開を工夫すれば、学習課題を自分事として捉え、地域の自然の魅力に気付くことができるだろう。

【手立て1】地域の広場の教材化

本校の校舎の裏手には「藤尾山」という山がある。本単元で教材として取り上げる「ふじおランド」は、藤尾山の下山道の隣に位置する広場である。そこは、自然豊かで植物や生き物も多く、以前は遊び場や授業で活用されていた痕跡が残っている。しかし、現在はふじおランドの存在は知っているが、行ったことがない子どもが多い。そこで、「ふじおランド」を自分たちで楽しめる場所にしていこう活動を行う。そうすることで、自然豊かな環境に気付いたり、魅力ある大切な場所として親しみをもったりすることができる考えた。また、身近なものを教材とすることで、疑問が生まれた際に、すぐ現地調査へ向かえる利点を生かし、子どもが自ら考え、主体的に学習を進める姿を期待した。

【手立て2】Google フォーム・スライドを活用し、子どもの思い・願いを基にした単元構想・授業展開

Google フォームと Google スライドを活用する。Google フォームは、授業中の意見集約や振り返りに活用する。Google スライドには、代表的な振り返りを提示し、次時の導入で取り上げる。自分や友達の考えが授業に反映されることで、子どもは学習が自分たちの思いとつながっていることを実感することができるだろう。教師があらかじめ決めた課題ではなく、子どもの思いや願いを基に学習を構想することで、学習課題を自分事として捉え、主体的に活動へ取り組めるようにしたい。

【仮説②】

掲示板を使ったり、地域・家族・他学年に発信したりするなど、人と関わる場を工夫し、自分と友達の意見との共通点・相違点に気付く場を設定すれば、自分の考えに自信をもちながら探究活動に取り組むことができるだろう。

【手立て3】自分の考え・立場を明確にした話し合いの場の設定

クラス内掲示板に互いの困りごとを掲示し、共有し合う。友達の困りごとについて、自分のペースで考えを整理できるようにする。話し合いでは、学習支援アプリ『ふきだしくん』を活用する。事前に自分の考えを形にし、自分と似た考えの友達の存在に気付けるようにする。意見を視覚的に共有することで、自分の考えに自信をもち、話し合いの際にも発言することができると思う。

【手立て4】学びを地域や他学年に発信する場の設定

「ふじおランドの魅力を伝えよう」を目標に、地域の人や家族、下級生へ発信する場を設定する。相手意識をもって準備を進めることで、協働しながら探究活動へ主体的に取り組めると考える。

4 検証の方法と指導計画

(1) 検証の方法

本研究では、抽出児A児の変容を追いながら、手立ての有効性を検証していく。

〈A児の実態〉

物事を多面的に見ることができ、気付きも多い。一方で、相手が自分と違う意見をもっていると、自信のなさから、意見を変更してしまうことが多い。

〈教師の願い〉

自然や友達と繰り返し関わることで、自分の考えに自信をもってほしい。友達と協働し、探究活動に取り組んでほしい。

5 研究の実際と考察

(1) ふじおランドに行こう

①ふじおランドで思いっきり遊ぼう。(手立て1・2)

ふじおランドで自由に遊び、気付きを伝え合う時間を確保した。A児は、特に卒業記念樹の看板に興味をもった。

A児の振り返りには、多くの疑問が記述されており、昔のふじおランドの様子に興味が高まっていることが分かる【資料1】。また、A児は休み時間に「近いからすぐに行けてうれしい、また行きたい」と話していた。これらの姿から、身近にある場所を教材としたため、子どもの気付きや疑問が自然と増えていき、次時への意欲が高まったことが分かる。昔のふじおランドに興味をもつ子が多くいたため、本校の卒業生である地域の方をゲストティーチャーとして招いた。

【資料1】A児のGoogle フォームでの振り返り

スキー板や色付き丸太とか昔どうだったんだろうなと想像がはかどって楽しかったです。タイムカプセルとか卒業記念の木の真実が気になるので聞いてみたいです。

②ゲストティーチャーから昔のふじおランドの話聞こう。(手立て1・2)

第3時の導入では、Google スライドで代表的な意見を大型モニターに掲示した【資料2】。A児も友達との共通点に気付き、「同じ気持ち」と共感する姿が見られた。地域の方にゲストティーチャ

ーを依頼したことを伝えると、「もっと知りたいから、またふじおランドに行きたい」「ふじおランドができた当時の藤尾山の様子をインターネットで調べたい」という調べ方について2つの意見が出た。そこで、子どもの意見を集約し、調べ方を自分たちで選択できるよう、Google フォームを活用した。フォームを確認すると、「ふじおランドに行つて調べたい」という思いの子が8割程いたため、まずは現地で調べ学習を行うことを提案した。A児は「自分たちで調べ方を考えられるのがうれしい。卒業記念の木の周りを見たり、他に同じような看板があるか探したりしたい」と疑問をさらに広げ、今後の探究活動への期待を高めた。

ゲストティーチャーに、子どもの頃のふじおランドの様子を話して

もらった【資料3】。子どもたちはゲストティーチャーとの対話を通して、色付きの丸太は昔遊具だったことや、スキー板を用いて落ち葉スキーが行われていたことを知った。A児は、自ら卒業記念樹について質問した。質問後

は、ゲストティーチャーとふじおランドを散策した。ゲストティーチャーとの対話の中で、A児は、いろいろな木の名前を知り、「知らないことばかりだな」とつぶやき、新たな疑問をもつ様子が見られた。このことからA児は、木そのものへの興味・関心が高まり始めたと考えられる【資料4】。A児の振り返りには、昔のふじおランドが楽しそうだったことや質問したことで疑問が解決し、満足したことが記述されており、ふじおランドへの関心がより高まっていた【資料5】。

(2) ふじおランドわくわく計画スタートだ

①計画を考えよう(手立て1・2)

ふじおランドで繰り返し体験活動を行った子どもたちは、「もっとふじおランドで楽しく遊びたい」という思いが高まった。そこで「どのようなふじおランドにしたいか」という話し合いを行い、「ふじおランドわくわく計画～最高な自然をみんなで楽しもう～」というテーマを決めた。

一人一人が計画を考え、その内容から、「植物で工作」「図鑑作成」「自然を生かした遊びを考える」の3チームに分けることにした。A児は、「自然を生かした遊びを考える」チームの中で、ふじおランドでスタンプラリーをしたいという思いをもっていた。しかし、友達の「宝探しをしたい」という意見にすぐに賛同し、自分の考えを十分伝えられない姿が見られた【資料6】。A児は、自分の考えを変えたのではなく、友達の考えを受け入れることを優先していたと考えられる。

③お悩み相談会をしよう(手立て3)

計画を進める中で、各チームで困りごとが生じたため、全体で話し合う場を設けた。自分の考えをもった上で話し合いに参加できるように「わくわく計画掲示板」を作成し、困りごとに対するアドバイスを付箋に書いて貼る活動を取り入れた。【次項資料7】。「植物で工作チーム」の「破れにくい葉の種類を知りたい」という困りごとに対して、A児は「昔の道にあったきんかんの葉が破れに

【資料2】Google スライド

なんでふじおランドに丸太とかスキー板が置いてあるんだろうなんのために置いてあるんだろうと思いました。
南部小出身の人に聞いてみたいなと思いました。

【資料3】ゲストティーチャーの話を聞く子ども



【資料4】ゲストティーチャーと散策するA児

GT: モッコクやクロバイとか看板がついている木があるだよ。
A児: 初めて聞いた名前ばかり。あと、木の種類とかあまり考えたことなかった。
C1: どんぐりの木の種類を覚えたいな。
A児: どんぐりにも種類があることも知らなかったよ。知らないことばかりだな。

【資料5】A児のGoogle フォームでの振り返り

昔はふじおランドが広がったことや、スキー板で落ち葉スキーをしていたことや木のことも教えてくれました。今まで謎だったことを教えてくれたので、もっとふじおランドに詳しくなれたので嬉しかったです。質問もできて嬉しかったです。

【資料6】A児のグループ活動の様子

A児: ふじおランドでスタンプラリーがしたいな。
C1: 昔使われていた場所に景品とかを置いて宝探しがしてみたいよ。
A児: 宝探しすごくいいね! それにしようよ。
C2: 2人の計画すごくいいと思うから、上手に組み合わせるのはどうかな。
A児: 組み合わせるのいいね!
C1: 昔使われていた場所を回るスタンプラリーはどうか? 『昔ふじおランドスタンプラリー計画』はどうか?
A児: すごくいいと思う! それにしよう!

くくて強いと思う」と付箋に書いた。

話し合いでは、学習支援アプリ『ふきだしくん』を活用し、自分の考えを可視化した【資料8】。A児は、付箋にまとめた自分の考えをふきだしくんへ入力した。話し合い中のA児は、「破れにくい葉は色が濃いモッコクなのではないか」という意見に対し、「きんかんの葉も色が濃いから強いのではないかと、自分の考えを発言した。これまで友達の意見に賛同することが多かったA児が、「色が濃い」という友達の考えとの共通点に気付き、根拠を基に自分の考えを伝えることができた。

③わくわく計画をクラスに発表しよう（手立て1・3）

昔使われていた場所を知ってほしいという思いから、A児は、『昔スタンプラリー』を計画し、マップを作成した【資料9】。また、スタンプの代わりに葉の絵を描いてもらいたいという思いでスタンプラリーのカードを作成していた【資料10】。ゲストティーチャーや友達との関わりから、資料5のA児の「スタンプラリーをしたい」という思いが、「昔の場所を知ってほしい」「木の種類の多さにも気付いてほしい」という、相手に伝えたい思いへと変容した。この姿から、自然との繰り返しの関わりに加え、友達との対話を重ねたことで、「遊びたい」という思いが「自然の魅力を伝えたい」という思いへと学びが深まったと考えられる。

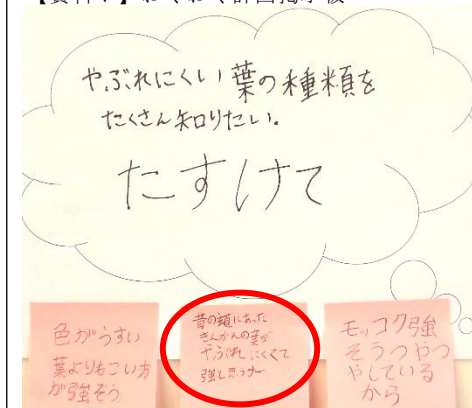
計画が完成した子どもたちは、クラス内で発表し合った。A児の堂々と自信をもって発表する姿が見られた。友達から「遊具があったところや落ち葉スキーの場所とか昔のことを生かしてすごい」と言ってもらい満足感を得ている様子がうかがえた。

（3）ふじおランドの魅力をみんなに伝えよう

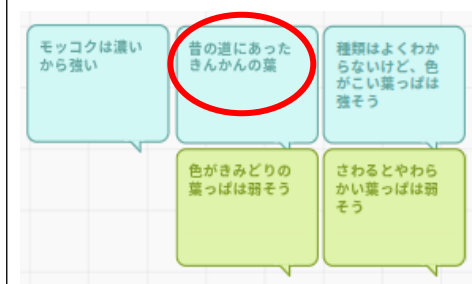
①地域の人や家族に紹介しよう（手立て2・3・4）

わくわく計画で考えた遊びを体験した子どもたちは、「楽しかったからこそ自然を大切にしたい」という思いへと高まった。その一方で、「ふじおランドがなくなったらどうなるのかな？」とつぶやく子もいた。そのつぶやきをきっかけに、『環境学習副読本わたしたちと環境』を活用し、森林の減少により土砂災害の被害が拡大することを学習した。A児の振り返りには、「台風が来ても土砂災害が起きなかったのは、木のおかげだと分かった。ふじおランドのおかげで、自分の家が助かっていると思った」とあった。この記述から、自然を遊び場としてだけでなく、自分たちの生活を支える大切な場所として捉えるようになったと考えられる。子どもたちは、ふじおランドの新たな魅力も発信したいという思いをもつようになった。発信する相手を意識したことで、自分たちの学びを見つめ直す姿が見られた。そこで、学習したことをまとめ「ふじおランドの魅力を伝えよう」という目

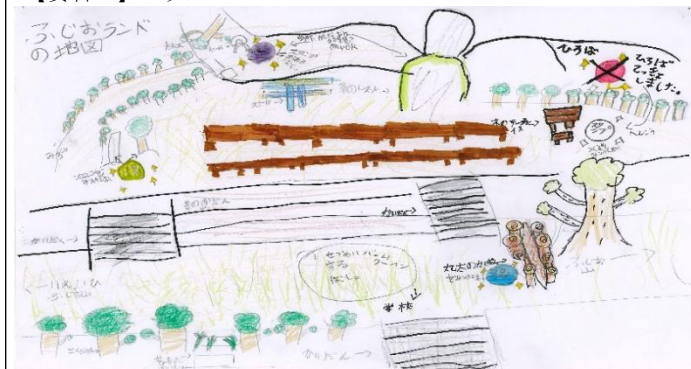
【資料7】わくわく計画掲示板



【資料8】『ふきだしくん』より



【資料9】マップ



【資料10】カード



標を立て、学習発表会で地域の人や家族に発表することにした。

学習発表会で伝えたい魅力について話合った際、「楽しい場所」「木や生き物」「木の役割」という意見が多く出た。劇の形で発表することになり、台本や小道具も自分たちで考えたいという声が上がった。

台本作りの話し合いでは、マンガ『はたらく細胞』を参考にして、『はたらくふじおランド』を子どもが発案した。台本は、国語の授業で学習した「始め」「中」「山場」「終わり」の流れを基にした。はじめの話し合いでは、A児は消極的だった。振り返りには、「自分たちのわくわく計画が台本に入らないかも」と書かれていた。A児の他にも、自分たちが考えた計画を台本に使ってほしいという意見が多かったため振り返りを全体に共有した。友達の思いを知った子どもたちは、休み時間にも台本を考える姿が見られた。台本作りの続きを行った際は、「計画名をセリフの中に入りたい」という意見が出た。「山場」で、子どもは木の役割を伝えたいと考えていた。A児の「木がないと土砂崩れになりやすくなるのは知っているけど、台風の時木はどのような役割をしているのか」という疑問をきっかけに、子どもたちは自ら課題を見だし、探究を進める姿が見られた【資料1 1】。

学習発表会後のA児の振り返りには、「自分たちで一から作った学習発表会だったから楽しかった」とあった【資料1 2】。このことから、友達と意見を交流しながら活動をつくり上げた経験が、自分たちの学びへの自信や達成感につながったと考えられる。

②低学年をふじおランドに招待しよう（手立て3・4）

「ふじおランドで遊びながら魅力を伝えたい」という声が上がったので、仲良し学年の2年生を招待することにした。

話し合いでは、「昔、遊びに使っていた場所を伝えたい」という意見が多く出たため、A児のチームが考えた『昔スタンプラリー』が話題に上がった。しかし、A児が「2年生は元気な子が多いから楽しんでもくれるか心配」と発言したことで流れが変わった。「丸太を使った体を動かす遊びを入れると2年生は喜んでくれそう」「木の知識をクイズ形式で伝えると分かりやすいかも」など、A児が相手の立場を考えて発言したことをきっかけに、子どもたちは「どうすれば2年生でも楽しめるか」という視点で話し合うようになった。その結果、クイズを行った後、丸太を使って遊び、『昔スタンプラリー』を行うことに決まった。

当日、A児は2年生の安全のために手をつなぎ、危険な場所での声かけを工夫しながら行っていた。『昔スタンプラリー』の時は、昔の場所も知ってもらいたいという思いも伝えながら遊び方を説明することができた。【資料1 3】。A児は活動後、「2年生がふじおランドのことを好きになるように卒業記念樹のこととかも教えることができた」と振り返った。相手意識をもって活動内容を工夫したことで、相手に応じた伝え方を考えながら主体的に活動に取り組む姿へと成長したことが分かる。このことから、友達との意見交流を通して互いの考えを取り入れながら学びをつくり上げた経験が、A児だけでなく学級全体の自信や主体性の向上につながったと考えられる。

【資料1 1】「山場」の話し合いの様子

- C1：山場でてくる木と戦う敵キャラどうしようね。
T：『はたらく細胞』ではがんだったよね。
いきなり変なお化けは出せないよね。
C2：森林がなくなると台風の時土砂崩れになりやすくなるから…
A児：敵は台風だね！おもしろそう！
C3：ふじおランドの木たちが私たちを守るために台風と戦うシーンを山場にしよう。
A児：でも、土砂崩れになりやすくなるってことしか知らないから、台風が来た時の木の戦い方を知らないな。
C4：たしかに！みんなで調べよう。先生、今から調べてもいい？

【資料1 2】A児の発表会後の振り返り

みんなで話し合って台本を考えました。自分たちで一から作ってきた発表会だったから楽しかったです。

【資料1 3】説明するA児



6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

①仮説1について

身近な自然の広場を教材化したことで、子どもたちは、疑問に思ったことをその場で確かめたり、繰り返し対象と関わったりしながら、自然の特徴や魅力に気付き、主体的に探究活動へ取り組む姿が見られた。また、Google フォームや Google スライドを活用して、子どもの思いや疑問を授業に反映したことで、自分たちで学びをつくり上げているという実感を持ちながら学習をすすめることができた。単元終末のA児は、「田原南部小学校にしかない自然がいっぱいな場所なので大切にしていきたい」と振り返っている【資料14】。このことから、ふじおランドの魅力に気付くだけでなく、地域の自然を大切にしたいという思いをもち、校区への愛着を深めることができたと考ええる。

【資料14】A児の単元全体の振り返り

ふじおランドのことはたくさん知ることができたけど、自然のことも分るようになったし、田原南部小学校にしかない自然がいっぱいな場所なので大切にしていきたいと思いました。

②仮説2について

単元当初は、友達の意見にすぐ賛同することが多かったA児であったが、掲示板や『ふきだしくん』を活用して自分の考えを整理し、友達との共通点や相違点を意識しながら話し合う経験を重ねたことで、根拠を基に、自信をもって自分の考えを伝えられるようになった。また、友達やゲストティーチャーとの対話を通して考えを見直したり、深めたりする中で、「ふじおランドでスタンプラリーをしたい」という思いは、「地域の自然の魅力を相手に伝えたい」という思いへと深化した。さらに、低学年を招待するための話し合いでは、相手意識をもって活動内容を工夫する姿が見られた。このことから、友達と協働しながら探究活動を進めることで、自分の考えを深め、相手意識をもって行動する姿へと成長したことが分かった。

(2) 今後の課題

本研究を通して、子どもたちは、ふじおランドの自然に親しみ、その魅力や大切さに気付くことができた。一方で、「地域の自然を守るために自分たちができることは何か」を主体的に考え、実践につなげるまでには至らなかった。環境保全への関心は高まったものの、オオスズメバチの出現や暑さなど、安全面や季節的な制約により、継続的な体験活動を十分に設定することができない場面もあった。今後は、安全面や活動時期に配慮しながら、地域の方と協働して自然環境を守る活動へ発展させることができる単元構成を検討していきたい。

7 おわりに

情報化が進む社会では、インターネットを活用して多くの情報を得ることができる。しかし、ふじおランドへ実際に足を運び、自分の目で見て、友達や地域の方と対話しながら学ぶことで、子どもたちは自らの気付きを主体的に伝え合う姿を見せた。「実際に足を運び、その目で見る」体験は、子ども同士の自然な対話や協働を生み出し、学びをより深めることにつながった。また、自分の目で見て、友達と考えを交流しながら得た学びは、子どもたちの心に深く残り、ふじおランドは特別な学びの場となった。

人とのつながりが希薄になりつつある現代だからこそ、地域の自然や人との関わりを通して育まれた経験が、子どもたちにとって心のよりどころとなり、ふるさとへの愛着や誇りにつながることを願っている。今後も、地域の「人・もの・こと」と積極的に関わる探究活動を大切に、友達と協働しながら主体的に学び続ける子どもの育成を目指して研究を積み重ねていきたい。